

仏を売る人々

延暦二十一年二月十九日伝教大師が南都六宗の寺々の僧侶と、桓武天皇の御前に公場対決して、法華經こそ仏説中の第一の經典なりと、当時の仏教界に認めせしめ、その証拠として比叡山に大乘の戒壇を建立してここに四百有余年、今は過去のものとなった。奈良の寺々はその後どうなっておつたらうか、これを探ぐるのも無意味ではないと、叡山の学僧たる蓮長は、或る日一日の暇を得て、古都奈良に古き寺、古き仏を求めて漂然と旅立ったのである。

それは、治承四年平清盛が平重衡をして東大寺、興福寺を焼かしめたが、源頼朝が鎌倉に幕府を創設すると建久六年に東大寺を、その前年に興福寺を再建して、国内に鎌倉幕府の威力を誇示してより五十年後の、時は寛元四年の青葉の頃であつた。

ここは興福寺の境内である。大きなむくの樹が亭々としてそびえておる。その樹の下で見物人を前にして説明しておる老母がある。

「治承四年の十二月、この興福寺が焼討ちになつた時でございます。その時の煙が御覧なされ、

あの樹のうつろの穴にはいりまして戦さが終わった後で、生残った興福寺の坊さん達が、これを消そうと思ひまして、水を穴に入れましたが、くすぶっていて中々消えませんが、その後度々水を汲んでいれましたがどうしても消えませんが。余り面倒なのでその後は水をかけたり、かけなかったりしておりましたが、不思議なことには七十余日を経た養和元年閏二月四日という日に、ぴつたりとその煙が絶えました。ちょうどその日こそ太政入道平清盛殿が亡くなられた日でございます。入道殿は御存知の熱病、百人の人夫が追いつぎ追いつぎ比叡山の千手院より水を汲んで石の船にたたえて、その中に這入って冷やしましたが、水は湧き返って湯となればこそ、その苦痛は更にやむことなく、あたあたという声は、屋敷の門外にまで聞えたということでございます。そのあたあたという悲鳴がやんで命のなくなった時こそ、このむくの樹のうつろの煙が消えた時でございます……」

「今はこれこのとおり枝葉が繁っておりますが、なんとまあ、仏罰は恐ろしいものではございませんか」

思えば治承四年の十二月二十八日、平清盛は東大寺、興福寺の大衆が、日頃より自分の命令に従わぬのに業をにやして、平垂衡をして三万余騎の軍勢をもってこれを攻めさせたのである。

東大寺、興福寺は藤原氏の庇護によつて今日あつたのであるから、平家が政権を執つたのは心よく思つてはおらなかつた。よつて何にかにつけて平家の命令に従がわなかつた。その仔細を公

卿を勅使に立てて問えば、

「別に変った仔細はない。只々清盛という法師に逢いたくない、名前も聞きたくない」ただそれだけのことであると言う不遜な返答であった。

ここにおいて平清盛は奈良の僧達を威令をもつて屈伏せしめようと、備中の国の住人妹尾太郎兼康をして数百騎の兵を引いて奈良に下らしめたのである。

しかるに意気当るべからざる奈良の大衆は、却つてこれを殲滅して、兼康が家の子郎等の頸二十六を斬つて猿沢の池の淵に懸けた。兼康はほうほうの態で清盛の許に馳せ、面目なげに仔細を報告したのであった。

烈火の如く怒つた平清盛は、仏法も糞もあるものかと、平重衡をして三万余騎の軍勢をもつて東大寺、興福寺を焼打ちせしめた。

大仏殿に焼死したもの千七百余人、興福寺にては五百余人、在々所々の坊主堂舎にて二百余人、戦場にて討死の僧侶七百余人都合一万二百余人という。重衡は切りとつた三百の西瓜頭をもつて平清盛に軍功を誇らんとしたが、その惨状は平清盛の耳にも入つておつたので、その議に及ばずということになり、穀藏院の南の堀は此等一万数百人の死骸をもつて埋め尽したという程であった。

清盛によつてこれ程までに荒廃され、春日野の草の露、魔滅の灰に色替われりといわれた東大

寺、興福寺も、頼朝が鎌倉に幕府を樹立すると、その命によって十五年後の建久六年には見事に復興したのである。

聖武天皇は自ら「三法の奴僕」と称し、華嚴法蔵の壮大さを僅かながらでもこの地上に示そうと、この大仏を創建せられたが、頼朝の両寺復興はそんな気持からではなかった。

清盛が焼打ちをしたからこれを復興修理して、鎌倉幕府の権力を世に示したまでのことである。すでに金銅の大仏には人を救うという力はなくなっていた。復興された大仏殿をみて、それに魂の救済を訴えるものとてもなかった。

人はその大仏殿の東西二十九丈南北十七丈高さ十五丈という豪壮な建築物に頼朝の威光をながめてお上の力のすばらしさを見るだけであった。頼朝の意図した所もまたそこにあった。それさえみてくれれば充分であったのである。

故に、頼朝の命によって大仏殿建立となった時、当時名声の大いにあった法然上人は大勧進を請われたがこれを態よく断つて、俊乗房重源を大勧進に自分の代りに推挙し、重源が大仏殿建立の大命を拝した。然し法然上人は重源を戒めて、

「相構へて御房大あかがねにくはれて、一大事の往生忘れるべからず」

といわれた程であるから、これをもってみても、壮嚴を誇る大仏も或る意味からいえば、単なる大あかがねにすぎず、仏教本来の目的たる人の魂を救うなどという価値は当時すでになかった

といえるのである。

蓮長は興福寺の境内を歩き、今また大仏殿の前に佇立して感慨無量なるものがあつた。

帝王が三宝の奴と自ら土下座した三国にも比類なしといわれる五丈三尺の金銅仏も、人移りもの変われば、これは天下をとつたものが、その権勢を庶民に誇示する一つの道具にすぎないではないか。またそれに甘んじて寺も生きておるのである。

南都の七大寺たる東大寺、興福寺、大安寺、薬師寺、西大寺、法隆寺の寺々には古き仏を祭り古き寺の歴史を誇るが、一番大切な人の心の動きには全く無関係であつた。

参詣するものもその寺が何宗に属しておるかを知る人は少なく、それも参詣とはいえず見物と呼ぶべきであつた。

寺も見物料を生活の資としておるのである。

仏を売つて生き、仏を拝観させて生きてゆく、まことに大集経にいう五箇の五百歳中の、多造塔寺堅固時代の残物をここにみた。

「仏説に言う末法に入って百有余年今こそ……」

蓮長の胸には言い知れぬものが去来することしきりであつた。

